

---

# ぱりぱりっ

晴川 和美

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】  
ぱりぱりっ

【Nコード】  
N8410K

【作者名】  
晴川 和美

【あらすじ】  
「おっはよ〜!」  
軽快な声とともに背中に軽い衝撃が走る。  
「おはよ〜みさっち。朝からテンション高いね〜」  
私はそう答えながら軽く欠伸をした。

「みさちゃんおはよ〜」  
いつも通りの微笑み方をしながら沙織は言った。  
「大体〜、和っちはいつもテンション低すぎなんだよ〜」  
「朝だけだよ。第一朝はねむいじゃん?」

「あ、杏ちゃんだ。お〜い、杏ちゃん」

沙織が道の反対側を歩いてきた杏里に手を振る。こちらに気づいた杏里は車が来ていないことを確認してすぐに渡ってきた。

「お〜っす杏里」

「みんなおはよ〜」

「杏ちゃんおはよ〜」

口々に交わす挨拶。

清陵学園に通う和、美佐希、沙織、杏里の4人を中心に描いた学園ストーリー

## 第1話 プロローグ

「おっはよ〜！」

軽快な声とともに背中に軽い衝撃が走る。

「おはよ〜みさつち。朝からテンション高いね〜」

私はそう答えながら軽く欠伸をした。

「みさちゃんおはよ〜」

いつも通りの微笑み方をしながら沙織は言った。

「大体〜、和つちはいつもテンション低すぎなんだよ〜」

「朝だけだよ〜。第一朝はねむいじゃん？」

「あ、杏ちゃんだ。お〜い、杏ちゃん〜ん」

沙織が道の反対側を歩いていた杏里に手を振る。こちらに気づいた杏里は車が来ていないことを確認してすぐに渡ってきた。

「お〜っす杏里」

「みんなおはよ〜」

「杏ちゃんおはよ〜」

口々に交わす挨拶。こんな平和な日常の中、事件が起きるとは4人の内だれも思っていなかった。

## 第1話 プロローグ（後書き）

文章ベタな私の初めての作品です。ところどころ誤字とかあると思うので発見次第改正していききたいと思います。

第1話 第1章 小早川和の喪失（前書き）

登場人物の名前と読みを紹介しておきたいと思います。

こはやかわ  
小早川 和  
たちばな  
橘 美佐希  
えんどう  
遠藤 沙織  
くろかわ  
黒川 杏里

# 第1話 第1章 小早川和の喪失

## 第1章 小早川和の喪失

その日の2時間目、早くも事件は起こった。

(ふ、増えてる・・・)

「どうしたの？杏里。」

さつきからうつむいてぶるぶる震えてる杏里を心配した美佐希が声をかけた。

「体重が数グラム増えてた。とか？」

と和が凶星をつく。次の瞬間、さつきまで和が立っていた位置に杏里がいた。そして、

「きゅ〜」

2m先の壁に背を当て目を回している和がいた。

「こうして和ちゃんは天に召されました」

沙織が心底悲しむような顔で詩的にそうつぶやいた。

「勝手に殺すな〜」

力のない声で和が返事をするが、その直後がつくりと首を傾けた。

「本当に死んじまったんじゃねえの？」

と困り顔で美佐希。

「わ〜っ、和ちゃん大丈夫!？」

張り飛ばした張本人。杏里がようやく正気に戻ったらしく、気を失って白目を向いている和の肩をつかみ前後にゆっさゆっさとゆらす。

「う〜」

ようやく目を覚ました和が、

「あれ。ここは・・・？」

その言葉に一同

「「「「「「「「「「」」」」」」」」

絶句。

「？」

何が起こったのかわからない、といった顔で3人の顔を見つめる和。

「和、頭でも打った？」

最初に声を出したのは美佐希だった。

「和ってだれ？」

再び沈黙。

「作戦会議ー！」

そう叫んで和から離れる3人。

(あれって演技なのかな？それともマジで・・・？)

(どうしよどうしよどうしよどうしよどうしよどうしよ)

(保健室に連れていった方がいいのかしら？)

(そうだな、保健室に連れていけば演技かどうかもわかるしな)

(どうしよどうしよどうしよどうしよどうしよどうしよ)

「それじゃあ保健室に連れて行くということだ」

作戦が決定したところで和の方に振り返る。が、

「あれ、和つちどこ行った？」

そこには和の姿はなかった。

「作戦会議をしている間にどこかへ行ってしまったようですな」

マイペースな沙織はそれでもあまり心配していないようだった。

「どうしよどうしよどうしよどうしよどうしよどうしよ」

「あーっ、うるさいっ！ー！」

\*

どこか遠くを見るような目で中庭を歩く少女がいた。ランドセルが似合いそうな身長なのに着ているのはその高校の制服だった。購買に用意してある一番小さいサイズであるにも関わらず、夏服の短い袖は肘まで達し、スカートも脛の中程まである。

(ここ、どこだろう・・・)

先程背中から思いつきり壁にぶち当たり、記憶を失った少女。小早



川 和は、目がさめた時から目の前にいた3人の少女たちがなにやらヒソヒソ話している間にぷらぷらとここまでやってきていた。

「和っち〜!」

どこかで誰かを探しているような声がする。そういえばさっきの少女らは自分のことを『和』って呼んでた気がする。しかし、自分はある少女たちが誰なのか分からない。そもそも自分の名前すら分からない状態だ。

(ここ、どこだろう・・・)

頭の奥底で、既視感のような錯覚を感じる。もつとも、本来なら1度は見たことがあるはずの光景である。

「あ、いた!杏里、沙織。居たよ!」

不意に後ろから声がした。見ると、さっきの少女の内の一人在、校舎の方を見ながら手招きしている。その後者の方から残りの二人も出てきた。

「見つかってよかった〜」

どこかで見たような顔に張り付いた微笑みの少女と俯きながら何かブツブツ言ってるツインテールの少女に私はあつという間に包囲され、両脇をガツチリと固められた。

「えっ?あつ!」

「これで逃げられないね。さ、保健室へレッツ・ゴー」

右脇を固めているツインテールの少女は見た目よりも力があり、

「どっ・・・うし・・・ど・・・よ」

と始終ぶつぶつ言ってた。

第1話 第1章 小早川和の喪失（後書き）

第1章です。2章以降も頑張って書いていきたいと思っています。

## 第1話 第2章 罪の意識

### 第2章 罪の意識

気がついたら思いっきり投げ飛ばしていた。

あの時を表すならその一言に尽きるだろう。周りからはそれなりにチャホヤされるスタイルでも、これ以上体重が増えるのは許せなかった。今日の身体測定で1週間ぶりに拒絶していた体重計に乗った。その前後の記憶は無い。だがないということはそれほど衝撃的な結末だったのは目に見えている。もちろん、今日という日のためにそれなりに運動はしてきたし、食事も抑えていたはずだ。その努力を覆すまるつきり否定するような結果だったのだろう。そして、気がついたら。

「杏ちゃん、大丈夫？」

不意に隣からかけられた声にようやく正面を向いた

「うん」

沙織はどこか抜けてはいるがいつも周りに気を配れる優しい子でもある。それに比べて・・・

「んで結局体重どれくらい増えてたんだ？」

「お前も殴り飛ばしてやろうか？」

ドスの効いた声で唸る。ひっと小さな悲鳴をあげて後ずさる美佐希。まあまあ、となだめる沙織。どさくさに紛れて逃げ出す和。

「あ、待てえ」

陸上部の短距離に所属する美佐希に追いかけられあっという間に捕まっけて戻ってくる。

「でもそんなになるほどショックだったんでしょね」

と沙織が言うが、

「それが私自身もショックで覚えてなくなっ・・・」

「今日は本当に記憶喪失日和だなあ」

困り顔で美佐希が呟く。

突然、

「うっ」

和が頭を抑えてうずくまる。

「どっ、どうしたの和？」

杏里がヒステリックな叫び声を上げる。

「急に頭が・・・」

「頭？頭が痛いのか？」

沙織が丁寧話しかける。

「それに少しフラフラする」

杏里の脳裏にふと、ある知識の断片が浮かび上がる。 交通事故

が原因の障害は事故後数年たっても発症する場合がある。

「それになんだか瞼が重く・・・」

「ただの寝不足なんじゃ？」

美佐希が冷静に突っ込む。

「そういえば昨日も3時までゲームをしていたんですって」

沙織が補足を入れる

「・・・」

杏里沈黙。

「あ、杏里？」

美佐希がおそろおそろ黒いオーラを発しつつある杏里の顔を覗き込む。

「杏ちゃん？」

沙織も声を掛けるが、

「・・・」

杏里は拳を握り締め、

「なんじゃそりゃああ！！」

正陵高校空手部も顔負けの一撃を和に向かって叩き込んだ。もともとそこまで体重の無い和ではあったがうまい具合に上向きのベクトルが掛かり、10m先の、丁度最初に記憶を失った壁にしこたま背



「演技だな」

「何その温度差!？」

記憶が戻った和を入れた四人の心は暖かった。

## 第1話 第2章 罪の意識（後書き）

週1くらいのペースで・・・書いていけたらいいなあと思う今日この頃。

日々色々なラノベ・雑誌・ハードカバーを友達から借りては読みあさってすこしずつ文章つまくなっていけばいいなあと思ってます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8410k/>

---

ぱりぱりっ

2010年10月20日13時28分発行